

# 「咳・くしゃみ・鼻水が出る」「咳・くしゃみ・鼻水が出る」

咳、くしゃみ、鼻水…ときたら、どんな病気を思い浮かべますか？  
もちろん犬にも、ウイルス性の呼吸器感染症はありますが、  
それ以外に、心臓病や気管・鼻のトラブルなどの可能性もあります。  
「風邪じゃないの」と様子見しないで、動物病院で受診しましょう。



子犬や高齢犬はとくに危険、  
ウイルス性の感染症は、ワクチンで予防を  
呼吸器感染症

犬の代表的な呼吸器感染症には、ジステンパーやケ  
ネルコフがあります。子犬や免疫力の低下した高齢  
犬などは感染しやすいので、とくに注意が必要です。  
ワクチンで予防できる病気ですので、定期的なワクチ  
ン接種をおすすめします。

## ●犬ジステンパーウイルス感染症

犬ジステンパーウイルスによる感染症で、初期には  
鼻水や発熱、次第に咳やくしゃみ、嘔吐下痢などが見  
られるようになり、さらに進むと、麻痺や痙攣などの  
神経症状を引き起こすこともあります。

## ●ケンネルコフ(伝染性気管気管支炎)

犬パラインフルエンザウイルス、犬アデノウイルス  
II型、細菌などが単独もしくは複合感染することで起  
こります。空咳の発作や発熱など、人の風邪に似た症  
状が長く続きます。治療は、対症療法や細菌感染があ  
る場合には抗生物質を使用して、回復を待ちます。

咳、息切れ、散歩を嫌がるなどの  
症状が見られたら、心臓病の疑いが  
心臓のトラブル

心臓病になると、全身に血液を正常に送り出せな  
く、様々な症状が現れます。まず、乾いた咳や息切れ、  
疲れやすい、運動を嫌がるなどの症状が現れ、さらに  
進むと、肺水腫による呼吸困難や、腹水や胸水がた  
まるようにもなります。進行性の病気ですから、早期発  
見がたいへん重要です。

一般に心臓病の根治治療は困難なため、安静療法、  
食事療法、薬物療法を組み合わせて、症状の緩和や病  
気の進行を遅らせることが中心になります。また、肥満  
させない、過激な運動や興奮を避ける、極端な気温差  
に注意するなど、家庭での生活管理も欠かせません。

## ●僧帽弁逆流症(閉鎖不全症)

心臓の左心房と左心室の間にある、血液の逆流を  
防ぐ重要な働きをしている僧帽弁が、しっかり閉じな  
くなることで起こります。犬の心臓病の3分の2  
を占める、高齢期の小型犬によく見られる病気です。

## ●拡張型心筋症

犬に多いのは心筋症のなかでも「拡張型」と呼ば  
れるものです。心筋が薄く伸びてしまい、心臓の収縮力  
が低下して、血液の循環不全をきたす病気です。大型  
犬に多いのが特徴です。

## ●フィラリア症

蚊が媒介する犬糸状虫(フィラリア)が心臓や肺動  
脈に寄生することによって起こります。他の心臓病同  
様、咳、荒い息づかい、散歩を嫌がるなどの症状で気づ  
くことが多く、進行すると、腹水や咯血、失神などを起  
こすこともあります。

治療には、手術で虫を取り出す方法、駆虫薬で虫を  
殺す方法、症状を抑えながら虫の寿命を待つ方法があ  
り、病状の進み具合いと犬の健康状態に応じて選択さ  
れます。しかし、虫を除去できても、一度傷ついた血管  
や心臓が元通りに回復するわけではありませんので、  
フィラリア症は何よりも予防が大切です。



くしゃみ、鼻水、呼吸の異常は、  
鼻や気管に原因があるかもしれません  
鼻・気管などのトラブル

## ●鼻炎・副鼻腔炎

鼻炎にかかると、鼻水やくしゃみ、時に目やにが出る  
こともあります。鼻水も最初はサラサラしていましたが、  
重症化すると黄色や緑色のドロドロとした膿のよつな鼻  
汁になります。慢性化すると、副鼻腔に膿がたまる副  
鼻腔炎になることも。

原因は、ウイルス、細菌、真菌(カビ)などによる感染、  
異物の吸い込みによる粘膜の炎症、花粉やほこりによ  
るアレルギーのほか、上あごの歯周病の炎症が鼻にま  
で広がって、副鼻腔炎を引き起こすことがあります。

## ●気管虚脱

気管が押しつぶされたように扁平に変形し、呼吸が  
しにくくなっていく病気です。最初は空咳から始まり、  
次第に呼吸の際にガーガーとアヒルの鳴き声のよう  
な音を発するようになり、ひどくなれば呼吸困難を起  
こします。短頭種や気管の細いポメラニアンなどの小  
型犬に多く見られ、肥満や老化も発症の引き金になり  
ます。

治療は、咳止めの薬や気管支拡張剤などによる対症療  
法が一般的で、肥満させない、首輪などを圧迫しない  
などの日常的な配慮も大切です。症状がコントロール  
できない場合には、手術も検討されますが、難度の高い  
ものになります。



## ●逆くしゃみ

逆くしゃみとは、グーグーと鼻水をすすめるような音  
とともに、強く空気を吸い込む動作です。短頭種に多  
い「軟口蓋過長症」(のどにあるヒダが垂れ下がって気  
道をふさぐ病気)によく見られる症状で、ひどくなれば  
手術が必要です。

一方、原因不明で、逆くしゃみを繰り返すケースもあ  
ります。発作は、通常、長くても数分で治まり、その間、  
犬は頭を前に伸ばし立ったままの状態、意識を失った  
りすることはありません。発作が治まればまったく正  
常に戻ります。しかし、とくに治療の必要はなく、発  
作時に、のどや舌をさすったり、早く治まりませ

